Book Review

Dental Start Book

これで解決!　欠損歯列の臨床診断

鈴木　尚　著

A4 判変，120 頁
定価 6,300 円
（本体 6,000 円＋税 5%）
医歯薬出版刊

Reviewer
小西昭彦　Akihiko Konishi
（東京都・小西歯科医院）

はっきりと覚えているわけではないが，鈴木　尚先生と初めてお会いしたのは四半世紀も前，大学を卒業して6，7 年もたったころだったと思う．コップ酒を片手に先生と向き合っていた記憶があるので，「臨床歯科を語る会」の“お酒の部屋”だったのだろう．

私より 10 歳年上の鈴木先生は，すでに著名な臨床家で，咬合に関する造詣の深さや補綴処置のすばらしさにおいて，確固たる地位を築いていらっしゃった．生意気盛りの私は口角泡を飛ばして鈴木先生にくってかかっていたが，鈴木先生はそんな私を懐深く受け止めてくれ，「歯科治療において一番重要なのは総合的な“見立て”，つまり“診断”ではないかな」と教え諭してくださった．当時の私には，鈴木先生のおっしゃる“診断”がどういうものかほとんど理解できなかったが，笑みをたたえた先生のやさしい表情だけは今でもはっきり覚えている．

その後，勉強会などで鈴木先生の話をうかがう機会が増え，先生のおっしゃる“診断”の意味が自分の思っているものとは全く次元が異なることに気がついた．

最初に学んだのは第 1 編で詳しく解説されている“疾病の 3 つのタイプ”の話だ．それまで歯科疾患といえば齲蝕と歯周病の 2 大疾患のみを考えるのが普通で，“力”を考慮する歯科医がいたにしても，それを齲蝕や歯周病と同列において重要視する人はいなかった．しかし，現在では，このパワータイプを意識することが歯科治療の結果に大きな影響を与えることを疑う歯科医はほとんどいない．これは鈴木先生の先駆的な考え方がなしえた功績の一つではないだろうか．

歯の喪失の大きな原因は齲蝕であり歯周病であり，力によって歯が抜け落ちてしまうことはほとんどない．しかし，“力”が歯を失う直接の原因ではないにしても，欠損歯列の病態形成に大きく関与する．何らかの理由で一本の歯を失えば，その歯にかかっていた“力”は残された歯が担わなければならない．残された歯は負担が増え，歯周病の共同破壊や破折の危険性が増加し，欠損は拡大されていく．それに伴い，咀嚼側は偏位し，歯列は変化し，顎関節にも異常をきたすようになる．欠損歯列の病態をつくりだすのは，単に齲蝕，歯周病という疾患だけではなく，実は“力”の要素こそが病態の複雑さと多様性を生みだしている元凶なのである．そして，その多様な病態は通常の診断ではとらえることができない．主訴を多方面から考察し，現症を詳細に観察することで患者一人ひとりの背景に横たわる物語を読み取り，その物語に相応した治療の結末を与えなければならない．

鈴木先生のおっしゃる「欠損歯列の臨床診断」とは単に欠損部をどのように補綴するかという問題ではなく，患者をまるごと引き受け，哲学するアートなのである．